

北海道中央ユーラシア研究会 第 83 回例会

2010年1月9日(土) 15:00-18:10

(北海道大学スラブ研究センター4階小会議室401)

斎藤祥平「言語学者H.C.トルベツコイのユーラシア主義(1920-1937年):

ソ連と社会ダーウィン主義への挑戦」

(北海道大学大学院文学研究科修士課程)

討論者: 杉浦秀一(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院)

司会者: 宇山智彦(北海道大学スラブ研究センター)

出席者数: 10 名

<報告要旨>

ロシア人亡命者の思想であったユーラシア主義に、政治的影響力はほとんどなかった。しかし、言語学、民族学、地理学、歴史学の専門家集団として、ユーラシア主義者たちは影響を与えた。彼らの学問に注目することで、このユーラシア主義に新たな意義を見出すことができよう。



ユーラシア主義者たちは反社会ダーウィン主義的な考え方を共有していたが、それはまた彼らの専門的な学問的立場と、民族・文化・政治・歴史などに関する思想的立場とを結びつけるものでもあった。特に、トルベツコイの言語論における収斂進化論的な立場は、系統が異なる民族同士でも地理的な環境を共有することによって類似性や共通点を持ち得るという主張に結びつく点で、多種多様な民族を包括する思想であったユーラシア主義と密接に関わっていた。

トルベツコイらの進化論は、「偶然・闘争」よりも「目的・環境」を重視する 19 世紀ロシアのラマルク主義的進化論の流れの中に位置づけることも可能である。しかし、亡命後の彼らの思想が、なぜ「ロシア」や「スラヴ」ではなく「ユーラシア」であったのかという問いに答えるには、1920-30 年代に彼らが置かれていた状況を検討しなければならない。本報告では、以下の三点からこの問題を考察した。

①ヨーロッパに亡命後、ロシア人亡命者が人種主義の問題に直面したこと、②ソ連外部からの観察者としてボリシェヴィキを批判しつつも、ユーラシア主義者たちが自らの理想を多民族国家ソ連に重ね合わせようとしていたこと、③1930 年代、ユーラシア主義者たちが、言語学・地理学といった学問によって「ユーラシア」を根拠付け、この概念を構築しようとしていたこと、である。

ユーラシア主義者たちは亡命先のヨーロッパではなく、ソ連に自らの将来を描き、その統治理念としては「ロシア」ではなく、「ユーラシア」が適切だと考えた。ヨーロッパで亡命者として暮らすロ

シア人は、社会的にも、人種的にも「弱者」であった。ユーラシア主義者は、「強者」に有利な理論、社会ダーウィン主義に対抗する手段として、「ユーラシア」という「多様性」、その民族による「協力」を選んだのだろう。

ユーラシア主義を祖国ソ連に反映させるという彼らの希望は、結果的に叶うことはなかった。しかし、ユーラシア主義とプラハ言語学派の関係に見られるように、諸学問がユーラシア主義の形成に関わったと同時に、ユーラシア主義者のアプローチがそれぞれの学問に還元され、その学問の発展に貢献するという側面もあった。また、「ユーラシア」を学問的に根拠付けようという彼らの営みは、すなわち「ユーラシア」という概念の壮大なる創造の過程であったともいえる。この過程とは、地理学と言語学の知識、方法論の融合や、疑似科学の社会思想への応用の試みであった。このことは、ユーラシア主義者の活動が、彼らが批判した社会ダーウィン主義を含めた、この時代の知的潮流の枠組みの中にあつたことを意味する。

ユーラシア主義はロシア帝国やスラヴ主義といった過去、もしくは現代ロシアの思想傾向や国際関係、ナショナリズムと関連付けることもできよう。しかしそれ以上に、1920-30年代と共に生き、この時代に反応しながら形成された思想であった。急激に歴史が変化した時代にあつたユーラシア主義が、新しいものに触れ、1920年の当初には見られなかった思想の相貌を示してくるのは自然なことであった。

[記: 斎藤祥平]

<参加記>



報告者に斎藤祥平氏を迎えた2010年最初の北海道中央ユーラシア研究会は、充実した内容の報告と示唆に富んだコメント、そして活発な議論により、非常に有意義なものになった。斎藤氏はこの研究会の前日に修士論文を提出したばかりであり、本報告もそれをもとにしている。筆者はこの研究会に参加するのは久しぶりであったが、斎藤氏の研究は筆者の主要な関心対象である

ロシア思想史と密接に関わっているので、興味深く拝聴した。

斎藤氏の根本的な関心は、亡命ロシア人ニコライ・トルベツコイが「ユーラシア」を志向するに至る思想形成過程に向けられている。これは筆者の知る限り、汗牛充棟の様相を呈している先行研究においても、意外に突きつめられていない問題の一つである。ユーラシア主義の思想的源泉として、スラヴ主義、パン・スラヴ主義、トゥラニズムなどがよく引き合いに出されるが、ユーラシアという概念は、それらから必然的に抽出されるわけではない。従来の研究者の多くは、「なぜロシアあるいはスラヴではなく、ユーラシアなのか」という根本的な問いに拘泥することなしに、1920-30年代の亡命ロシア人がおかれていた政治的文脈を中心にユーラシア主義を論じてきた。しかし、このような議論はせいぜい、ユーラシア主義が誕生した背景の説明で終わってしまう。それに対し、

斎藤氏の試みはトルベツコイの思想形成過程、亡命先での体験が彼に与えた精神的影響の分析を通じて、彼が「ロシア」ではなく、「ユーラシア」を志向するに至った過程を解明しようとするものである。筆者は、この根本的問題を解明せんとした斎藤氏の野心的な試みに敬意を表したい。

さて、報告の内容についてであるが、前半部ではトルベツコイの生涯、1920-30年代のユーラシア主義の概略、亡命前のトルベツコイと社会ダーウィン主義との邂逅が論じられた。後半部ではトルベツコイが亡命先で味わった、ロシア人であるがゆえに直面した人種問題、その影響の結果として生じたソ連観の多様化を通じて、マルクス主義にかわるソ連が包括する領域の新たな統治理念としてユーラシア主義が生成される過程が論じられた。こうして、トルベツコイのユーラシア主義の形成過程における重要な思想的契機として、ソ連の現状に対する批判と将来への期待、社会ダーウィン主義に典型的な単線的進歩史観への懐疑が指摘された。



斎藤氏の報告に関して、コメンテーターの杉浦秀一氏は、ソ連との政治闘争に関する議論に終始しがちであった従来の研究と比べ、ユーラシアの「理念」に着目した点、ダーウィン主義、進化論、優生学などの学問の展開に着目しながら、学問と政治の関係を捉えている点などを評価し、修士論文としての水準の高さを指摘した。そのうえで杉浦氏は、ロシアにおけるダーウィン主義批判(ノヴゴロドツェフ『社会的理想について Об общественном идеале』など)とユーラシア主義の関連性を指摘した。またリップマン、ヴィトゲンシュタイン、ラッセルなど、現代思想の起点となる思想家が出現し、構造主義を育んだ 1930 年代の思想的文脈においてユーラシア主義を捉えなおす必要性を指摘した。つまり、1930 年代の知的インパクトは、事物の「本質」ではなく「関係」に目を向けたことにあるが、「ユーラシア」という概念の誕生も、このような知的文脈と無関係ではないのではないかというわけである。確かにユーラシア主義は、斎藤氏も論じたように、「ユーラシア」という「本質」ではなく、1920-30 年代の様々な知的潮流に対する反応を磁場として、すなわち「関係」において成立したイデオロギーである。その意味で筆者には、杉浦氏の指摘は一考すべき重要なものと思われた。

このほか、ユーラシア主義者とロシア・ソ連の関係、彼らのいう「理念統治」、西欧観、ユーラシア主義運動からの逸脱者との相違、非ロシア系のユーラシア主義者との関係などに関して、会場から数多くの質問とコメントが寄せられた。これは斎藤氏の研究が様々な領域に関わり、異分野の研究者にとっても刺激的なものであったからであろう。

斎藤氏は今後、博士課程に進学し、ユーラシア主義研究をさらに深める予定であると聞く。今回の報告は、今後の彼の活躍を予感させるものであったように思う。まずはこの修士論文をもとに公表されるであろう論文に期待したい。

斎藤氏は今後、博士課程に進学し、ユーラシア主義研究をさらに深める予定であると聞く。今回の報告は、今後の彼の活躍を予感させるものであったように思う。まずはこの修士論文をもとに公表されるであろう論文に期待したい。

[記： 山本健三（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）]